

## 林鶴梁の文章観とその位置付け

鈴置 拓也

### 一 問題の所在と研究方法

林鶴梁（一八〇六―一八七八）は江戸時代の儒学者である。

名は鸞、通称は鉄蔵、のち伊太郎、字は長孺、鶴梁と号す。文化三年（一八〇六）に上州高崎（群馬県高崎市）で生まれ、文化十四年（一八一七）頃江戸に出て佐藤一斎（一七七二―一八五九）、松崎慊堂（一七七二―一八四四）らに学び、その後は幕臣として働いた。彼の主な役職をあげると、天保十三年（一八四二）の御勘定評定所留役助、弘化三年（一八四六）の甲府徴典館学頭、嘉永六年（一八五三）から安政五年（一八五八）の五年間勤めた中泉代官などがある。この中泉代官時代には、東海道一帯に地震が起り飢饉が襲った。その際、鶴梁は米倉を設置し、今後の飢饉対策として食糧貯蔵計画を立てるなどの治績を挙げた。その後も安政五年から文久元年（一八六一）まで

は柴橋代官を勤めるなどした。明治維新後は職を辞して、麻布谷町の自宅に開いていた私塾端塾で生徒に漢字を教授していた。

著作としては『鶴梁文鈔』<sup>①</sup>『鶴梁文鈔続編』<sup>②</sup>『乙巳稿』<sup>③</sup>などがある。なお、国立国会図書館には『鶴梁先生文稿』が所蔵されている。

鶴梁に関する一次資料としては、天保十四年（一八四三）から文久元年にかけての『鶴梁林先生日記』全六冊<sup>④</sup>（都立中央図書館蔵）が残っており、保田晴男氏による翻刻『林鶴梁日記』<sup>⑤</sup>がある。さらに、保田氏は翻刻した『林鶴梁日記』に基づいてその生活に迫った『ある文人代官の幕末日記』<sup>⑥</sup>を著している。

鶴梁の文章については、『鶴梁文鈔続編』の序文で森田節斎（一八一―一八六八）に「君の文、譬ふれば長江大河の波瀾洶湧たるが如く、驚くべく喜ぶべく、学に淵源有るに非ざれば安んぞ能く此に至らんや」と称されたほどであり、また信夫恕軒（一八三五―一九一〇）は尾藤二洲（一七四五―一八一四）

や長野豊山（一七八三―一八三七）らと並べて評価し、<sup>7</sup>他にも『近世名家文粹』<sup>8</sup>などに採録されているように、鶴梁は文章家としても名を馳せていた。

鶴梁についての先行研究としては、その生涯を概観した坂口筑母氏の『小伝林鶴梁』<sup>9</sup>が早い。さらに、嘉永六年から安政五年まで勤めた中泉代官時代については鈴木鋭彦氏「林鶴梁日記 遠州中泉代官時代」<sup>10</sup>、同氏「林鶴梁日記（二）文人代官の支配地巡検」<sup>11</sup>によって日記に基づいた中泉代官としての実績が研究されている。これらは、いずれも幕臣や交友の面から林鶴梁を研究したものである。

このように幕臣としての研究がある一方で、管見の及ぶ限りでは鶴梁の文章観に関して深く研究されたものは見当たらない。しかし、『鶴梁文鈔』及び『鶴梁文鈔続編』などの資料には彼の学問形成及び文章観に関する文章が散見され、それらの資料からは彼の文章観を伺うことができる。また、鶴梁の文章観に対して少なからぬ影響を与えたと考えられる人物として明・唐順之（一五〇七―一五六〇）の存在があり、このことは彼の自筆稿本である『乙巳稿』中に収録されている「書唐荆川文集後」から伺うことができる。この『乙巳稿』は従来の研究では深く取り上げられておらず、ここから鶴梁の文章観を伺うことによって、彼の文章観に対する研究に新たな視点を取り入れることができる。さらに鶴梁は後年に至って弟子を指導する際

に、古文を読むより先に明清の文を読ませており、このことから彼の文章観の一端を見ることができるといえる。

以下、鶴梁の文章観を明らかにするために、まず鶴梁の学問形成、特に文章観の形成過程について明らかにする。次に同時代の文学思潮を確認しつつ、鶴梁の文章観に関する記事を『鶴梁文鈔』など彼の著作から読み取り、同時代の文学思潮の中で彼自身の文章観がどの立場より発せられたものであったのかを考察していく。特に鶴梁が一時期唐順之の文集を好んで読んでいたことに注目し、「書唐荆川文集後」を取り上げ、唐順之より受けた影響を伺う。さらに、鶴梁の「答今田生論文書」<sup>12</sup>から、彼がどのような理由から明清の文を重要視していたのかを読み取り、最後に結論として彼の文章観を幕末明治期における文章界の潮流に位置付けることを試みる。

## 二 文章の学習過程

林鶴梁は文化十四年三月頃に江戸に出て、その後、正確な年代は不明だが、佐藤一斎から朱子学に基づいた経学を、長野豊山及び高知平山から律令格式や作詩文を、松崎慊堂からは古学を学んだとされている。<sup>13</sup>他にも文政五年（一八二二）頃には長尾赤城に師事しており、ここで藤森天山や山崎苞などと出会った。特に天山とは親しく、文政七年（一八二四）に山崎苞を含

めた三人で『今人詩英』を出版し、また天保五年（一八四三）に天山が土浦藩儒となるもその待遇に不満を持っていたことに對して、鶴梁は「与藤森淳風書」「答藤森淳風書」を書いて天山を励ました。

この頃の自身について鶴梁は「読項羽記」の中で「余少くして游俠を好み」、つまりまじめに学問をしていなかったと言い、文政十二年（一八二九）、二十四歳の時に「項羽記」を読んで、項羽が当時の自身と同じ二十四歳で蜂起したことに感激して真剣に学問に向き合うようになったことを述べている。ここで発奮した鶴梁はその翌年に長野豊山に師事して作文法を学び始めた。

鶴梁が学んだ作文法及び文章の修養を伺う上で重要な資料として「作文秘訣」がある。これは鶴梁が佐藤一斎、長野豊山から学んだ作文上達法について回顧しているものである。この文章によると、鶴梁は先に一斎から「上は六経語孟騷左馬より、下は唐宋元明清諸大家に逮ぶ」文を「潜心誦読し、久しくして已めざ」れば、「文氣我が胸臆の間に浸潤して、融会貫通し、混然として一と為」り、これにより古文が「我が物と為る」と教えられた。この教えを説いた一斎も中井竹山（一七三〇～一八〇四）の元で学んでいたときには専ら「左氏及び唐宋八家の文」を暗誦させられたといい、一斎は「作文秘訣」はこの暗誦に限ると考えていた。また、一斎の教育は経書解釈ばかりで

あって、作文法に関して鶴梁が尋ねても「韓柳欧蘇の文を読むのみ」と答えるだけであった。この答えに對して鶴梁は「凡そ学ぶ者経を研むるは固より、然れども経も亦た文なるのみ。故に能く作文する者に非ざれば、必ずしも経を研むこと能はず」と不満を持っていた。その後鶴梁は一斎の元を離れ、当時文名が高かった長野豊山のもとで学び始めた。豊山の教育方法は、「古文の中最も善き者を選び、文法在る所に就きて、縷陳して分析し」、また時には「誦読して自ら悟る」というやり方であって、一斎の教育方法とは異なっていた。この教育方法の違いについて鶴梁が豊山に尋ねたところ、豊山は、一斎は生徒の学習段階に合わせて教育をしており、鶴梁の当時の学習段階においてはまだ暗誦以上のことを教える必要はなかったのだ、と答えた。これを聞いた鶴梁は最終的に一斎の教育方法に納得しており、この「作文秘訣」を子弟のために書き記した。

以上、鶴梁の学問形成の過程を明らかにしてきた。鶴梁は佐藤一斎から朱子学に基づいた経学を学ぶとともに作文上達の方法として「上は六経語孟騷左馬より、下は唐宋元明清諸大家に逮ぶ」文を「我が物と為る」となるように「潜心誦読」することを教えられた。この作文上達法を一斎は初学者のためのものに位置付けていたようだが、古文を暗誦してそれを自身のものとするという考え方は、後に述べる鶴梁の古文の学習に対する考え方にも強い影響を与えていた。

### 三 同時代の文学思潮

江戸時代の漢詩界においてはその文学思潮の変遷に関する研究がなされているが、文章界における文学思潮に関する研究はあまりないように感じられる。その中で、青木正児氏によれば、文化・文政頃に、「文章に於ては李王の古文辞は夢の跡となつて唐宋八大家の流行が盛となつて来た。文化十一年に官板で『唐宋八大家読本』が翻刻せられ」<sup>〔17〕</sup>その後も唐宋八大家に関する書物が流行していたといい、ここから考えれば、鶴梁の時代にはこれが広く読まれていたであろうし、実際に鶴梁の文章観には唐宋八大家の影響が強く見られる。しかしこの唐宋八大家の流行に関しても具体的な研究はなく、実際に当時の人々がこの時期の文章界をどのように見ていたのかは更なる研究を要する。

一方で、鶴梁の自筆稿本である『乙巳稿』には「送耐軒先生歸江東序」という乙骨耐軒（一八〇六―一八五九）<sup>〔18〕</sup>の東帰を送った文章があり、その中には同時期の文学思潮に対する批判が読み取れる。

この文章は、耐軒が天保十四年・弘化元年（一八四四）の二年間勤めた甲府徴典館学頭の任期を終えて江戸に帰る際に、学頭としての耐軒の功績を讃えたものであり、鶴梁はこの文中で「今夫れ世の所謂学者は浮華の文駢儷の辞のみにして、之を学

ぶ者は新奇を騁し浅易を喜び、古道を以て玩具と為し、嘲風吟月の外、以て業を為すこと無し」と、この頃の学者が、新奇で浅薄なものばかりを好み、儒学に基づく古の道を吟詠のための玩具とし、詩作ばかりに耽つているといい、これを「何の学か之れ有らん」と批判した。その中で耐軒はこの弊に陥らず、学頭として甲斐国の人々に「礼楽経済の理」「道德仁義の説」を教え、「国家有用の士」を養成しようとしていたと称賛している。

この文章からは、専ら古文の文辞ばかりを学び、それを自身の詩文創作のためにのみ用いて満足している者達に対して、それは学問ではないとする鶴梁の批判が読み取れる。学問形成の過程で「上は六経語孟騷左馬より、下は唐宋元明清諸大家に逮ぶ」文を自身のものとするために学んでいた鶴梁にとって「古道」を学ぶことは、一方ではこれを「我物」として詩文に表現できるようにするためであり、もう一方では「国家有用の士」となるためであった。

余論となるが、鶴梁は「送耐軒先生歸江東序」の最後で、今後の徴典館の学頭も耐軒の教育方法を守るべきだと述べている。その後、実際に弘化三年には鶴梁も徴典館学頭となっており、おそらくは「国家有用の士」を養成するための耐軒の教えを守っていたと考えられる。

#### 四 鶴梁の文章観

次に、鶴梁が文章において何を重んじていたのかを具体的に考察していく。

『鶴梁文鈔』には「去陳言説」<sup>19)</sup>がある。「陳言」は古臭い言辞の意であり、韓愈の「答李翊書」<sup>20)</sup>に「惟だ陳言を之れ務めて去る」とあるように、韓愈が言論を確立し、後世まで伝えることを求めて行ったことの一つとして挙げられている。鶴梁はこれに基づいて、文章を学ぶ際の重要な点を次のように主張している。

「古文を学ぶ者は、其の神氣を学び、其の言語を学ばず、斯れ善く学を為す者なり」と、古文を学ぶ際には「言語」を学ぶのではなく、「神氣」を学ぶべきであると考えた。次に鶴梁は古文の「絶佳」なるものとして「孟莊左馬」を挙げ、これらが前人を踏襲しておらず、文の一機軸を出したとして、これを「精神性靈の文」とした。ここでいう「精神性靈の文」は、他の何物にも依らずに作者の性格感情が発露された文章と考えられる。さらに鶴梁は例として「余嘗て優を観、其の古今の人物を演ずるに、其の言語を模し、其の容貌を擬し、其の忠胆義氣の状を写し」ていることに對して、「其の為す所虚仮に出でて、未だ嘗て其の実有らざるのみ」と言い、作文もこれと同じである

と主張した。つまり、演劇において俳優が台詞ばかりをいくらずく上手く演じていても中身は偽物に過ぎないという考えである。

鶴梁は柳宗元の「読韓愈所著毛穎伝後題」内の言葉を引用して、「世の模擬竄窃は、青を取り白に媲ひ、皮を肥やし肉を厚くし、筋を柔らかくし骨を脆くする者にして、辞を為す者の之を読むなり。」と、模擬をする者が外面ばかりを重視していることを否定的に見ている。韓愈も「若し聖人の道、文を用ひざれば則ち已む。用ふれば則ち必ず其の能くする者を尚ぶ。能くする者は他に非ず、能く自から樹立して、因循せざる者はなり。文字有りてより来、誰か文を為らざらん。然れども其の今に存する者は、必ず其の能くする者なり。」<sup>21)</sup>と云い、聖人の道は他の何者にも依らずに自身で樹立させたものであり、今に存しているこれらの文は全てこれによるものである、と主張していた。

鶴梁の古文からは言語を学ぶのではないという考えは、古道が詩文創作のためにのみ用いられ、「浮華の文駢儷の辭」ばかり蔓延っていた同時代に對する批判と共通している。

鶴梁はこれに續けて、「古語皆用ふるべからざるか」と言えはそうではなく、古語（ここでは古文の文辭と考えられる。）を「鎔化」させて自身のもののように胸中から流出させれば、それはすでに自身の言語であると主張した。これも佐藤一斎から受けた「作文秘訣」と共通しており、「去陳言説」は鶴梁がそれを学び形成した文章観の現れであると考えられる。



鶴梁の文章観が文道合一を唱えた唐宋八大家の文学観に近いことが明らかとなった。このことを裏付けるように『鶴梁文鈔』には「跋曾南豊文」「跋王臨川文」「跋蘇穎浜文」があり、曾鞏（一〇一九～一〇八三）・王安石（一〇二一～一〇八六）・蘇轍（一〇三九～一一一二）の文章に対してそれぞれ自身の見解を述べている。その中でも鶴梁は曾鞏の文章を特に高く評価している。すなわち「醇茂の意は、断ずるに正確の理を以てし、渾厚の気は、運らずに円暢の筆を以てし、烹鍊の詞は、束ねるに詳整の法を以てす。和して流れず、緩やかにして滞らず、是れ南豊曾子の文なり。」（混じり気がなく豊かな心によって正しい理が断ぜられ、純朴な気によって流れる様に筆が運ばれ、洗練された言葉によって細かく整った文章が構成されていく。文章が調和しているも他に影響されることなく、緩やかに流れて止まることがない。これこそが曾鞏の文章である。）<sup>24</sup>といひ、曾鞏のみが唐宋八大家の中でこれを可能にしていると主張した。

鶴梁が曾鞏を高く評価したのは、唐宋八大家の中で曾鞏の持つ道学的気質が混じり気なく純朴であり、それが自然に文章として表現されているからであった。ここから伺えることは、作者の精神感情が発露された古文を自身のものとして身につけ、それを文辞に拘らずに表現したものが、鶴梁にとっての理想的な「文」であったということである。

鶴梁は曾鞏を高く評価していたが、これよりも先に、中国において曾鞏の文章を特に重んじていた者として、唐順之及び彼を含めたいわゆる唐宋派の存在がある。『乙巳稿』には「書唐荆川文集後」が収められており、その文章からは鶴梁が唐順之の影響を受けていたことを伺うことができる。

## 五 唐順之と唐宋派の文学理論及び江戸時代の日本における受容情況

日本において唐順之に関する研究は少なく、彼及び彼を含めたいわゆる唐宋派が主張した文学理論についてもあまり知られていない。よって、鶴梁が受けた影響を論じる前に少しく紹介したい。<sup>25</sup>

唐順之、字は応徳・義修、荆川と号す。武進（江蘇省常州市武進区）の人。年少のころは李夢陽（一四七二～一五二九）・何景明（一四八三～一五二二）の文集が流行しており、唐順之は特に李夢陽の文集に親しんでいた。嘉靖八年に進士に挙げられ、兵部武選司清吏主事に任ぜられるも、翌年休みを請い帰郷、同年母の死により喪に服することになり、嘉靖十一年（一五三二）に喪が明けて京師に戻り職に復した。この時王慎中（一五〇九～一五五九）と出会った。王慎中はこの頃にはすでに前七子が秦漢の古文を規範としていた事に対して大きな不満を抱いてお

り、文章には正当なる好ましい趣きがあると考え、必ずしも形式上から古人を模倣すべきではないと主張し、唐順之は王慎中のこの指摘を聞き入れ、文章の風格を転換させた。この後嘉靖十五年（一五三六）頃より彼らは前後七子が唱えた「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という主張に反対し、唐宋八大家を主として、唐代・宋代の文章を理想とすべきことを主張した。上記の二人に茅坤（一五二一―一六〇一）・帰有光（一五〇七―一五七一）を加えた四人を代表として、彼らを唐宋派と称する。

唐宋派の文学理論に関しては唐宋派内の各人によっても少しく主張が異なるが、『明代唐宋派研究』では、主に以下の三点を挙げている。以下、唐宋派の文学理論を紹介するとともに、その中で唐順之の文学理論について具体的に見ていく。

一つ目は、韓愈らが主張した「文は以て道を明らかにす」に基づいて文道合一を説いた「正統論」である。ここでいう道とはもちろん儒教の道であって、文が道の体現であるという考えに基づいたものであった。王慎中や唐順之は、曾鞏の文を「聖人の旨に会通す」<sup>(56)</sup>、「三代以下の文未だ南豊に如くは有らず」<sup>(56)</sup>と評価しているように、唐宋八大家の中でも曾鞏が特に文によって道を明らかにできているとして重んじた。

二つ目は、前七子が文飾を重んじることに反対してなされた主張であるが、作者の修養に基づいた独特な思想観念をそのまま詩文に表現することを重んじた「本色論」である。特に唐順

之は陽明学の影響を強く受けていたことから天機を重んじており、創作する時には洗心して世間から離れ、静寂な心理状態を保ち、文には自身の胸臆を直接的に述べるべきであると主張した。

三つ目は、文章の規律である「法」を重んじる「法度論」である。唐順之は聖人が文を作ることを道の体現であり、後世の文人達はその文章を読み研鑽することを通じて「道」の奥義を窺いみることができると考えた。この「道」の変化したものこそが「法」であって、この「法」は文に内在するあらゆる面を体現する。だから「道」の変化する規律を注意して観察すれば、作文の「法」を掴むことができると主張した。

唐順之の評価については、『明史』に「学ぶ者其の奥也を測る能はざるなり。古文を為せば、洗洋紆折として大家の風有り」<sup>(57)</sup>と、彼の学問が浩博であり、その文章も高い評価がなされている。

日本において唐順之の名は藤原惺窩（一五六一―一六一九）の書簡<sup>(28)</sup>に記されるなど、その受容は江戸時代の初期からあったことが分かる。しかし、荻生徂徠が李攀龍や王世貞等を標榜として古文辞学を立ち上げたように、唐順之或いは唐宋派が江戸時代の文学主張に大々的に取り上げられたことはなく、その受容の程度もはつきりしていない<sup>(29)</sup>。しかし、斎藤拙堂（一七九七―一八六五）は唐順之に対して「荆川の学問淵博にして、

心を経済に留む。議論具に根柢有り、徒に文を以て伝はるに非ざるなり。」と、文章家として評価する一方で、経世済民に關しても心得ており、議論も浮ついていないと評価している。他にも、鶴梁の「作文秘訣」には、柴野碧堂が阿波藩儒であった際に唐順之の文章を暗誦させていたことが記されており、古文学習の場でも用いられていたことが分かる。

また文政元年（一八一八）には『唐荆川文粹』四巻が村瀬誨輔（一七八一～一八五七）によって出版されており、彼の序文からは鶴梁と同時代の唐順之に対する評価を伺うことができる。

村瀬誨輔（以下石庵）、字は季徳、号は石庵、通称は新次郎、誨輔はその名。尾張の人。名古屋藩儒であつた秦滄浪に学ぶ。

藩士田辺次郎太夫の養子となり、姓を田辺に改める。後に昌平黌教授出役となり、弘化三年には鶴梁とともに徽典館学頭に任命され甲斐国に赴く。また清国の現況を知ることが急務であると考え、『清名家小伝』四巻を編し、さらに『続唐宋八家文読本』十八巻を編すなどした。

『唐荆川文粹』は「明六大家文粹」の一つであり、管見の及ぶ限りでは四巻本として出版された文政元年・文政十三年刊本、先の四巻本に補刻一卷を含めて再版された天保八年重刊本がある。構成としては、まず初めに石庵の序、牧原半陶（一七八六～一八四二）による識語、「唐荆川小伝」、目録、本文となっている。

石庵は序文の中で、唐荆川の文を『易』でいうところの「言に物有り」「言に叙有り」を兼ね備えており、「覈実して証を明らかにし、浮議に涉らず、開闔起伏、秩然として条有り」、すなわち文章が実証的であって浮ついておらず、秩序だった構成になっていると評価した。次に石庵は唐荆川ら唐宋派と同じように公安派・竟陵派も李攀龍・王世貞らの「復古説」に反対したことをあげるものの、彼らは「鄙俚」「俚僻」と、下品で偏っており「深思」が足りてないとし、唐荆川の学問だけが浩博であって、それを文字に表せば「六経の旨」が上手くまとめられていると説いた。さらに、唐荆川が晩年に再出仕したことをあげ、これは忠誠が深くなければ出来ないことであって、この再出仕によって『明史』では「文苑伝」には入れず彼の忠節をはつきりと記していると考えた。そして最後に、『易』の「辞を修めて其の誠を立つる」という、君子が「業を修める」手段を荆川に当てはめている。

この序文からは、鶴梁と同時代に生きた石庵の唐順之に対する評価が読み取れ、後述する鶴梁の唐順之に対する評価とも非常に関係している。

## 六 鶴梁と唐順之

次に、弘化二年頃の成立であると考えられる『乙巳稿』から



「書唐荆川文集後」を取り上げ、この頃の鶴梁の唐順之に対する評価、さらにはその影響、唐順之との文学観の一致性を伺う。

求文之所以、為豪橫為峻潔為雄偉、發達者世固不為鮮矣。然唯其參古六經之文而有得者實為難也。余初誦南豐曾氏之文、以為古雅渾成洸洋紆折。雖云參之古六經之文、可以無愧矣。既而屏居山林兀然無事、益取南豐集而誦之。其明聖賢之道而闢秦蕪之蔽、三代以後學者多取未發。嗚呼南豐不唯文也、其得道者蓋亦然。頃者得荆川唐氏之集而又誦之。其論道而發之文辭、与南豐足以相感發矣。因謂荆川之文亦南豐之文也。其与王遵岩書曰、三代以下之文未有如南豐也。荆川学南豐、有得者而其言如此。然則達古六經之文、其唯在二子之文哉。荆川違忤時流、卜築陽羨山中堅苦績学。如此者十有餘年、是以邃其所蓄深、其所養於所謂古雅渾成洸洋紆折者、淵々乎其深也、浩々乎其大也、亦猶南豐不得志于有司、迴翔散地、遂不膺樞要之任、而文境大進。夫荆川蓄於文者与南豐同趣。如此而勉厲致学者亦如彼余也。屏居山林、沈潜反覆、以誦二子之文、而有知之。嗚呼因二子之文、而始可以達古六經之文矣哉。

文を求むるの所以は、豪横と為り峻潔と為り雄偉と為るににして、發達せる者は世より鮮なしと為さず。然れども唯だ其れ古の六經の文に參じて得ること有るは実に難しと為すなり。

余初めて南豐曾氏の文を読み、以為へらく古雅渾成洸洋紆折なりと。之を古の六經の文に參ずると云ふと雖も、以て愧づること無かるべし。既にして山林に屏居して兀然として事無く、益ます南豐集を取りて之を読む。其れ聖賢の道を明らかにして秦蕪の蔽を闢き、三代以後の学者未だ發せざるを取ることも多し。嗚呼南豐は唯だ文のみならず、其の道を得るは蓋し亦た然り。頃者荆川唐氏の集を得て又之を読む。其れ道を論じて之を文辭に發するは、南豐と以て相ひ感發するに足る。因て荆川の文も亦た南豐の文と謂ふなり。其の「与王遵岩書」に曰はく、三代以下の文未だ南豐に如くもの有らざるなり。荆川南豐を学び、得る者有れば其の言此くの如し。然らば則ち古の六經の文に達するは、其れ唯だ二子の文に在らん。荆川時流に違忤し、陽羨の山中に卜築し、堅苦して学を積む。此くの如き者十有餘年、是を以て邃に其の蓄ふる所深く、其の養ふ所の所謂古雅渾成洸洋紆折に於いては、淵々たり其の深きや、浩々たり其の大なるや。亦た猶ほ南豐志を有司に得ず、迴翔散地、遂に樞要の任に膺たらず、而れども文境大いに進むがごとし。夫れ荆川の文を蓄ふるは南豐と同趣なり。此くの如くして勉厲し学を致す者は亦た彼余の如きなり。山林に屏居して、沈潜反覆して、以て二子の文を読み、之を知る有り。嗚呼二子の文に因りて、始めて以て古の六經の文に達すべし。

鶴梁本文の冒頭で、文を求める理由として「豪横」「峻潔」「雄偉」となるためであると言った。つまり、恣でありながら清廉潔白であり、堂々として偉大な文章を書くためであった。続けて鶴梁は、この三点については達成できる者は少なくないが、「南豊曾氏」、すなわち曾鞏は、これに加えて「古六経の文」に比しても引けを取らず、さらに古の聖人の道をも会得していると評価した。鶴梁が他の唐宋八大家の者達よりも曾鞏を高く評価していたことは前述の通りである。

曾鞏を高くしていた鶴梁は、この頃には唐順之の文集をも手に入れて読んでいた。そこで彼が感じたことは、唐順之が道を論じている文章には曾鞏の文章と通じるところがあるということであった。唐宋派、特に唐順之は先述したように唐代・宋代の文の中でも曾鞏の文を最も重要視していた。

文章をここまで読んで、鶴梁が唐順之の文集を得たことに関係している可能性がある人物として浮上してきた人物がいる。すなわち田辺石庵の存在である。

石庵は先述したように、弘化三年に鶴梁と共に徽典館学頭を勤めた人物であるが、文政元年に出版した『唐荆川文粹』の序文で唐順之の文章が「六経の旨」をよくまとめられていると評価している。鶴梁は「頃者荆川唐氏の集を得て又之を読む」というように、弘化三年頃に唐順之の文集を手に入れており、その文章を「古六経の文」に比しても引けを取らない曾鞏の文

章と「感発」していると評価している。以上のことから推察するに、鶴梁が弘化三年頃に「荆川唐氏之集」を得たというのは、石庵によってもたらされたものではないだろうか。このことは鶴梁の日記には見られず、あくまで推測の域を出ないが、徽典館学頭と同僚である石庵が『唐荆川文粹』の編者であること、石庵と同様に鶴梁は唐順之の文章を「六経の文」に引けを取らないと評価していることを考慮に入れれば、鶴梁が唐順之の文集を手に入れたきっかけには石庵が関係していると考えられよう。もしそうだと仮定すれば、本文中の「荆川唐氏の集」は石庵の編した『唐荆川文粹』であつたと考えられる。このことは鶴梁の日記中から伺うことはできないものの、鶴梁は弘化三年七月十三日に、石庵の編した『方正学文粹』を購入したり、石庵より書籍を借りるなどとしており、石庵が関係する何らかの形で『唐荆川文粹』を入手した可能性は高い。

話を本文に戻そう。曾鞏と唐順之の二人は、文章が六経に通じているという共通点の他に、鶴梁も述べているように、地方で生活していたという共通点もある。曾鞏は「鞏才名を負ひ、久しく外徒となり、世よ頗る偃蹇不偶と謂ふ」と、自らの才能を誇っていたため、一時地方官を転々としていた。一方で唐順之は自ら請いて「陽羨の山中に卜築し、読書すること十余年」と、現在の江蘇省にある陽羨の山中で読書に耽っていた。しかし、これら地方や山中で生活することは、都会の時流に流され

ずに、「文境大いに進む」と鶴梁は主張している。

ここで確認しておきたいのは、鶴梁が甲斐国における生活について、山林に「屏居」、つまり世間から隠れて住んでいる、と言っていることである。『乙巳稿』からは他にも「贈圓右序」の中で「峡中に謫遷す」、つまり甲斐国に左遷されたという表現も見られる。鶴梁は弘化三年に甲府徹典館学頭を勤めており、これと同時期に『乙巳稿』が書かれたであろうことは前述した。そして学頭を勤めた後には再び江戸に帰っている。ということとは、江戸でそれまで勤めていた鶴梁が、弘化三年に甲斐国に赴任させられたことについて、左遷させられたと考えていたのではないかと推察される。確かに甲府勤番に赴任されることは俗に山流しと言われており、鶴梁がそのように考えたことは十分ありえる。

ここから伺えることは、そのように考えていた鶴梁が、同じく地方で生活していた時期に曾輩と唐順之が文章を大いに上達させたことに自らを重ね合わせ、氣にやむことなく、むしろ六経の文に到達できるように文の修行に励もうと考えていたことである。

鶴梁が唐順之の文章を学び、六経の文に到達できるように文の修行に励み、それを実作のうえにも応用していたことは『乙巳稿』中のその他の文章にもよく見られる。<sup>(36)</sup>

例えば「送耐軒先生歸江東序」の冒頭では、唐順之の「重修

解州関侯廟開顔樓記」中の「山西懞伎にして好氣、而して慷慨毅武、音節の士、多く其間に出づ。介子推、先軫、狼瞫、藺相如、馬服君諸人の若き」を引用して、「山西懞伎にして好氣、而して慷慨毅武、音節の士、多く出づ。先軫、狼瞫、藺相如、馬服君の若き是れなり」と、ほとんどそのまま転用している。

鶴梁はこの文章において、中国の山西と甲斐国を比較して、その地形が似通っていることを表現しており、山西の地の形容を唐順之の文章より改変をほとんど加えずに引用している。次に、同文章中で山西と甲斐国両地の人々の性格に関する部分においても「東川子詩集序」中の「愾然として馬を躍らし勇を買ふの氣有り」をそのまま引用している。この他にも「贈圓右序」の冒頭においては、「前後入蜀稿序」中の「雪嶺大江の雄渾、寢巫青城の竊麗、仙靈の窟宅する所、其の勝天下に甲たり」を引用して甲斐国の景勝を「峽州山川の雄渾竊麗なる天下に甲たり」と表現している。このように、この時期の鶴梁は唐順之の文集を読むことの他に、実際に文章中に応用して作文技術を高めようとしている。また、その引用するところは「愾然として馬を躍らし勇を買ふの氣有り」というように比較的勇猛な言葉が多いことに特徴がある。

唐宋八大家を文章の正統として重んじていた唐順之にとってその最終目標は六経の文に到達することであって、それら六経の文を研鑽することによって「道」の奥義を窺うことができる

と考えていた。注目すべきことは、唐順之は直接六経の文を求めるのではなく、唐宋の文章、特に唐宋八大家の文章を通じて求めようとしていたことである。このように主張した理由は、李夢陽、何景明らが秦漢以前の文章を模擬することを主張して以来、それが形式主義に陥っていたことに反対して、文道合一という儒家伝統の文学觀念に戻そうと考えたからである。鶴梁の生きた当時においても「浮華の文駢儷の辭」が蔓延っており、これに反対していた鶴梁は、弘化三年頃に曾鞏及び唐順之の文章を「沈潜反覆」して読み、「古六経の道」に到達するという考えを更に強めたのである。

さらに鶴梁と唐順之の共通点を言えば、それは唐順之の「本色論」にも見ることができる。先述したように、鶴梁は古文の「神氣」を学び取り、それを胸中から流出させれば古語を用いるとしても、それはすでに自身のものであると考えていた。これと同じ考えは唐順之の文学理論からも伺うことができる。すなわち、

蓋文章稍不自胸中流出、雖若不用別人一字一句、只是別人字句、差処只是別人的差、是処只是別人的是也。若皆自胸中流出、則爐錘在我、金鉄尽熔、雖用他人字句、亦是自己字句。

蓋し文章は稍に胸中より流出せざれば、別人の一字一句を

用ひざるが若しと雖も、只是別人の字句にして、差とする処は只是別人の差、是とする処は只だ是れ別人の是なり。若し皆胸中より流出すれば、則ち爐錘我に在り、金鉄尽く熔ければ、他人の字句を用ふと雖も、亦た是れ自己の字句なり。

六経に基づく古文を宗とし、それに基づいて自身の胸中を表現するという考えは、鶴梁の理論との合致性が強く見られる。さらに、他人の字句を自身のものとする方法は完全に一致しているといってもよい。

しかしこの「与洪方洲書」は、筆者が弘化三年時に鶴梁が手に入れたと考えた『唐荆川文粹』には収録されておらず、弘化三年の時期に鶴梁が唐順之のこの文学理論を摂取したと確定することはできない。もしこの文学理論を摂取していたと仮定するならば、それは鶴梁がこの後に唐順之の文章をさらに追求したことによるものと推察される。ともかく、鶴梁の考えには唐順之の文章理論の特徴を見ることができるのである。

## 七 結論と今後の展望

本稿では、林鶴梁の文章観について、彼の学問形成から始め、文章観について具体的に考察してきた。鶴梁は、森田節斎から学問が深く、活潑で勢いのある文章を書くと評された。また

「去陳言説」で鶴梁が唱えた「古文を学ぶ者は、其の神氣を学び、其の言語を学ばず」という主張に対して節齋は「文を解する者に非ざれば此の言を為す能はず。又此の言を了す能はず。」というように、鶴梁の文に対する理解においても高く評価していた。

このような評価を受けた鶴梁の文章観は韓愈ら唐宋八大家及びそれを継承した唐宋派、特に唐順之の文学理論に近いものであった。鶴梁は文辞にばかり耽る者達を批判し、文を道の体現であると考えて文を通じて道に到達することを最終目標とした。そして、六経や「孟莊左馬」といった「精神性靈の文」を読み、その中から「神氣」を学び取り、それを自身のものとして表現することが重要であるとした。この「神氣」を学び、それを自身の字句として表現することによって、自然と道に基づいた文章が書けるようになり、そしてまた道を得ることによって「国家有用の士」となることができるとした。

その一方で、鶴梁としては直接六経の文を読み始めるのではなく、六経の文に引けを取らない曾鞏や唐順之などの文章を通じて自身の文章を上達させるとともに、「古の六経の文に達しよう」と考えていた。このことは、唐順之ら唐宋派が韓愈ら唐宋八大家の文を通じて道に到達しようとしていたことと共通しており、その時よりもさらに時代が下った鶴梁は、唐宋の文章だけでなく唐順之を含めた明代及び清代の文章から古の道に到

達しようと考えたに相違なく、このことを裏付けるように、「答今田生論文書」には、古文を学ぶより先に明清の文を学ぶべきであることを弟子に教えていたことが記されている。

この文章の中で鶴梁は、現在（江戸時代）と明清との時代が近く、「文も亦た今人と遠からず」と考え、文を学ぶ手始めに明清の文を学ぶべきことを主張した。しかし、ここで挙げる「明氏の傑出なる者」の中には宋濂（一三二〇～一三八一）・帰有光（一五〇六～一五七一）・王陽明（一四七二～一五二九）・方孝孺（一三五七～一四〇二）の名はあるが唐順之の名はなく、鶴梁の晩年における唐順之の評価は特別高かったということではない。そうではあるものの、鶴梁は弘化三年の時期には唐順之の影響を受けていたことは確かであり、その後も唐宋八大家の文及び明清の文章を通じて「六経の道」を求めるという文学論は変化することはなかった。これらのことをまとめれば鶴梁は、佐藤一斎より受けた作文秘訣を、その学問形成から壮年期の実践を踏まえ、さらに後世のために伝えていったと考えることができる。

幕末明治期に、唐宋八大家文が流行していたことは先述した。この流行は、「明治年間之を嫌ずとして清朝の桐城派の古文が輸入された。是が最新の傾向で正統『古文辞類纂』の流行が是れである。」<sup>91</sup>と、明治期には唐宋八大家から桐城派の流行へと変遷していったと考えられている。桐城派は、散文において唐



宋派の理論を継承発展させたと言われており、鶴梁<sup>(12)</sup>の文章もこの流行の中で評価されていたといえよう。しかし、幕末明治期における文章の流行の変遷に関する研究は少なく、本稿で取り上げた鶴梁の文章観は、現状においては、この流行の中の一例としてしか取り上げることができない。一方で、中村正直（一八三二～一八九一）の文章観が「その人物が篤実の君子であったので、その文章も渾厚和平で曾南豊、唐荆川の風がある」と評価されているように、幕末明治期の文章界の評価の中からは唐順之の受容程度を伺うことができる。よって筆者は今後、漢文の流行の変遷に関して、その他の事例を取り上げて、唐宋派などの存在を含めたより広い視野で当時の漢文の流行の変遷を研究していく、同時期の文章界をより鮮明にしていく。

（注）

- （1）『鶴梁文鈔』（一八六七）
- （2）林圭次編『鶴梁文鈔続編』（山中市兵衛、一八八一）
- （3）『乙巳稿』については、坂口筑母『尾藤水竹 幕末の一奇士小伝』（明石書店、一九八一）参照。
- （4）日記の筆録期間には間々断絶がある。詳しくは『林鶴梁日記』第一巻（日本評論社、二〇〇二）「例言」参照。
- （5）保田晴男『林鶴梁日記』全六冊（日本評論社、二〇〇二～二〇〇三）
- （6）保田晴男『ある文人代官の幕末日記』（吉川弘文館、二〇〇九）
- （7）信夫恕軒『恕軒漫筆』卷上（吉川半七、一八九二）参照。

- （8）東條永胤編『近世名家文粹』（萬青堂、一八七七）
- （9）坂口筑母『小伝林鶴梁』全三冊（一九七八～一九八〇）
- （10）『人間文化』十号（愛知学院大学人間文化研究所、一九九五）
- （11）『人間文化』十二号（愛知学院大学人間文化研究所、一九九七）
- （12）『鶴梁文鈔続編』巻一
- （13）東京都立教育研究所編『東京教育史史料大系』第一巻（東京都立研究所、一九九一）「家塾 端」文化丁丑三月ヨリ安政己未五月マテ都合四十三年間故幕府儒者林大学頭員長佐藤捨藏江者朱子流経学、処士長野友太郎高知二三次江者律令格式并二作詩文、元掛川藩儒官松崎謙堂江者古学従学仕候。いずれも『鶴梁文鈔』巻一所収。
- （14）『鶴梁文鈔』巻七
- （15）『鶴梁文鈔続編』巻二
- （16）『青木正見全集』巻二（春秋社、一九八三）「国文学と支那文学」乙骨耐軒は文化三年（一八〇六）に鳥羽半七の次子として生れた。名は寛（完とも）、通称彦四郎、耐軒は号である。天保八年（一八三七）に乙骨半右衛門の養子となり、乙骨家第十一代を継ぐ。役職としては文政十二年（一八二九）昌平黉助教、天保十四年徴典館学頭（嘉永五年（一八五二）再勤）、安政二年（一八五五）監察局海防掛目付などを務める。
- （17）『昌黎先生集』巻十六
- （18）『昌黎先生集』巻十八「答劉正夫書」
- （19）『鶴梁文鈔』巻七「跋曾南豊文」
- （20）日本における唐順之の生涯に関する研究としては、松村昴編『明人とその文学』（汲古書院、二〇〇九）所収の田口一郎「唐順之の生涯と文学論」がある。

- (24) 以下唐順之及び唐宋派とその文学理論については黄毅『明代唐宋派研究』（上海古籍出版社、二〇〇八）による。
- (25) 『遵岩先生文集』卷二十二「曾南豊文粹序」
- (26) 『荆川先生文集』卷七「与王遵岩参政書」
- (27) 『明史』卷二百五「唐順之伝」（中華書局、一九八七）
- (28) 『藤原惺窩集』卷上（思文閣出版、一九七八）「惺窩先生文集」卷十二「手簡 与林道春」に「荆川七冊還来」とある。
- (29) 日本における唐宋派の受容に関する研究に関しては、『藝文研究』第五十四号（慶應義塾大學藝文學會、一九八九）所収の佐藤一郎「江戸・明治期における桐城派」の中で、桐城派の源流とされている唐宋派の代表人物帰有光を評価していた儒学者として、江戸時代前期には伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）、江戸時代後期には帆足万里（一七七八～一八五二）・市野迷庵（一七六五～一八二六）らがいたことを記している。その一方で、全体を通した唐宋派の受容に関する研究は乏しい。
- (30) 斎藤拙堂『文話』（一八三〇）卷二
- (31) 『明六大家文粹』には他に、『宋学士文粹』三卷、『方正学文粹』六卷、『王陽明文粹』四卷、『王順岩文粹』五卷、『帰震川文粹』五卷がある。
- (32) 保田晴男編『林鶴梁日記』第二卷「弘化三年七月十三日」の条に『方正学文粹』を十冊で購入したことが記録されている。また鶴梁は学頭の任期満了時に、村瀬晦輔による文政元年の序文を持つ『方正学文粹』四本を徴典館へ寄付しており、これは弘化三年七月十三日に購入したものと推察される。
- (33) 例えば『林鶴梁日記』第二卷「弘化三年十一月七日」の条に「甲志一箱六十九本、石庵江返ス」とあるように、鶴梁が石庵か

- ら書籍を借りていたことは間々見られる。
- (34) 『宋史』卷三百十九「曾鞏伝」（中華書局、一九七七）
- (35) 『明史』卷二百五「唐順之伝」
- (36) 以下に引用される「重修解州閔侯廟開顔樓記」「東川子詩集序」「前后入蜀稿序」はいずれも『唐荆川文粹』にも収録されている。
- (37) 『荆川先生文集』卷十二
- (38) 『荆川先生文集』卷十
- (39) 『荆川先生文集』卷十
- (40) 『荆川先生文集』卷七「与洪方洲書」
- (41) 『青木正児全集』卷二「国文学と支那文学」
- (42) 黄毅『明代唐宋派研究』参照。
- (43) 徳川公継宗七十年祝賀記念会編『近世日本の儒学』（岩波書店、一九四一）「徳川時代の漢文学（其一）——徳川時代漢学者の文章」

